大齋平日

早課

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじっしん あらざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏 なる者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

型なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

ニラネル テャ ニ サルレム セ ハサ ハゥ ゚゚゚
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ ょょ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

誦経「アミン」。

主憐めよ。三次

こうない ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

**た 來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

また おり かみ まえ こうはい ふふく 水れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

二聖詠静かに誦すべし、蓋此の時司祭寶座、各位の聖像、及び衆人の前に於て炉儀を行ふ。

第19聖詠

第20聖詠

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ しょよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

<聖三~天主省略>

【讃詞】

こめ なんじ たみ すく なんじ ぎょう ふく くだ む くに さいわい あた なんじ じゅうじか なんじ 主よ、爾の民を救ひ、爾の業に福を降せ、吾が国に福を与え、爾の十字架にて爾の すまい まも たま 住所を護り給へ。 こうえい ちち こ せいしん き 光榮は父と子と聖神に歸す。

世んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の恵を垂れたまで、「なんじ」をうめい。あらた。爾の恵を垂れたまで、「なんじ」をからなる住所に爾の恵を垂れたまで、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからなり、「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をからない。「なんじ」をいまればなり。

今も何時も世世に、「アミン」。

成嚴にして耻を得しめざる轉達、至善にして讃樂せらるる生神女よ、我等の祈祷を斥けず、正教の人の住所を固め、吾が国を護り給へ、獨 恩寵に滿たさるる者よ、爾 神を生みたればなり。

【重連祷】

輔祭 神よ、爾の大なる、憐に因りて我等を憐め、爾に祈る、��き納れて憐めよ。

(詠)主憐めよ。(三次)

輔祭 又吾が國の天皇、及び國を司る者の爲に祈る。

輔祭 又教會を司る我等の(府)主教()の爲に祈る。

輔祭 又衆兄弟及び衆「ハリスティアニン」の爲に祈る。

司祭 蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり、我等爾父と子と聖神。に光栄を帰す、今も何時も世世に。 (詠)「アミン」 神父よ、主の名を以て福をくだせ(祝讃せよ。)

司祭 光栄は一性にして生命を施す分れざる聖三者に帰す、今も何時も世世に。 (詠) 「アミン」



是の時誦経者敬みて左の六段の聖詠を誦す、衆人傷感の情を以て之を聽く。

【六段の聖詠】шестпсалмие

第3聖詠

おいる。 我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衞ればなり。

第37聖詠

ため なんじ いきどおり もっ われ せ なか なんじ いかり もっ われ ばっ なか けだしなんじ や われ 主よ、爾の 憤 を以て我を責むる毋れ、爾の怒を以て我を罰する毋れ、蓋爾の矢は我 に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪 に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を壓す、我の 無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱 て號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隱るるなし。我が心は は我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を寛むる者は網を設け、我を害 わんと欲する者は我が淪亡のことを言ひて、毎日悪しき 謀 を圖む、然れども我は 聾 の できる。 はだししゅ かれなんじ たの しゅ わ かみ なんじき たま かれい ねが の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聽き給はん。我言えり、願はくは す、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀しむ。我が敵 は生きて 愈 強く、故なくして我を疾む者は 益 多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が 我の救主よ、 谏 に來たりて我を救ひ給へ。

とまたが神よ、我を遺つる母れ、我に遠ざかる母れ、主我の教主よ、 速 に來たりて我を教 たまない給へ。

第62聖詠

で更に爾を思ふ、蓋爾は我の扶助なり、爾が翼の蔭に於て我欣ばん、我が靈は親しく爾に附き、爾の右の手は我を扶く。

ニラネル タҕ ニ セレレム セ ハサ ハっ ォォ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次 主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

第87聖詠 <是の時司祭至聖所より出で、王門の前に立ちて早課祝文を黙誦す。>

主我が 教 の神よ、我 書夜 爾 の前に呼ぶ、顧はくは我が 祷は 衛 が 顔 の前に室らん、 衛 の耳を我が 顧に 値けよ、 蓋我が 靈 は苦難に飽き、我が生命は地獄に近づけり。我は墓に入る者と等しくなり、力なき人の如くなれり、死人の中に投げられて、猶殺されて 柩に 臥し、 衛 に復記憶せられず、 衛 の手より 絶たれし者の如し。 衛我を深き坎に、 闇冥に、 満に置けり。 禰 の で 憧 は重く我に加はり、 衛 の波を 値 けて我を撃てり。 衛 我が 識る 所 の者を我より遠ざけ、我を彼等の悪むべき者となせり、我閉されて出ずるを得ず。我が 曽は 愁苦に因りて痛く疲れたり、主よ、我終日 衛 を呼び、手を伸べて 衛 に向へり。 衛 豊に死 せし者に奇跡を 施 さんや、 死せし者 豊に起ちて 衛 を讃揚せんや、 衛 の 憐 は墓の中に、 衛 の 真 は腐敗の地に豊に傳へられんや、 爾 の 奇跡は闇冥に、 衛 の義は遺忘の地に豊に ありれんや。 主よ、我 爾 に呼ぶ、我 の 祷 は 晨 に 爾 の前に在り。 主よ、 衛 は何爲れぞ我が

たましいとし、では、なんじのかんばせんかんがくしたました。我少きより。禍に遭い、幾と消え亡せんとし、爾の恐嚇を受けて我が疲は極れり。爾の憤は我を度り、爾の恐嚇は我を碎けり、毎日かり、の必要を受けて我が疲な極いり、なんじの我を置む。爾は我が友と親しき者とを我より遠ざけたり、我が識る所の者は見えず。

といった。 すくい かみ われちゅうやなんじ まえ よ 主我が 救 の神よ、我書夜 爾 の前に呼ぶ。

たが、 たいのり なんじ かんばせ まえ いた なんじ みみ ね ねがい かたぶ 願はくは我が祷は爾が顔の前に至らん、爾の耳を我が願に傾けよ。

第102聖詠

我が靈よ、主を讃め揚げよ、我が中心よ、其聖なる名を讃め揚げよ。我が靈よ、主を ほ あ かれ ことごと おん わす なか かれ なんじ もろもろ ふほう ゆる なんじ もろもろ やまい 讃め揚げよ、彼が 悉 くの恩を忘るる毋れ。彼は 爾 が 諸 の不法を赦し、爾 が 諸 の 疾 を療す、爾の生命を墓より救ひ、憐と恵とを爾に冠らせ、幸福を爾の望に飽かし なんじ わかがえ わし こと しゅ およ はくがい もの ため ぎ しんばん おこな かれむ、爾が若復さるること鷲の如し。主は凡そ迫害せらるる者の爲に義と審判とを行ふ。彼 は己の途をモイセイに示し、己の作為をイズライリの諸子に示せり。主は宏慈にして まょうじゅつ かんにん こうおん いか おわり いきどおり なが いだ お ふほう よ かれら
矜恤 、寛忍にして鴻恩なり、怒りて 終 あり、 憤 を永く懐かず。我が不法に因りて我等 に行はず、我が罪に因りて我等に報いず、蓋天の地より高きが如く、斯く主を畏るる者に お そのあわれみ おおい ひがし にし とお ごと か しゅ か ふほう われら とお 於ける其 憐 は大なり、東の西より遠きが如く、斯く主は我が不法を我等より遠ざけた り、父の其子を憐むが如く、斯く主は彼を畏るる者を憐む。蓋彼は我が何より造られし を知り、我等の塵なるを記念す。人の日は草の如く、其榮ゆること田の華の如し。風之を過 なき き その あ ところ またこれ し ただしゅ あわれみ かれ おそ もの よ いた ぐれば無に歸し、其有りし處も亦之を識らず。 唯主の 憐 は彼を畏るる者に世より世に至 り、彼の義は其約を守り、其誠を懐ひて、之を行ふ子子孫孫に及ばん。主は其寶座を天 た そのくに ばんぶつ す おき しゅ もろもろ てんし ちから そな そのこえ したが そのことば おこな に建て、其國は萬物を統べ治む。主の 諸 の天使、能力を具へ、其聲に 遵 ひて其 言 を 行 もの しゅ ほ あ しゅ ことごと ぐん そのむね おこな えきしゃ しゅ ほ あ しゅ ことご ふ者よ、主を讃め揚げよ。主の 悉 くの軍、其旨を 行 ふ役者よ、主を讃め揚げよ。主の 悉 くの造工よ、其一切治むる處に於て主を讃め揚げよ。我が靈よ、主を讃め揚げよ。 そのいっさいおさ ところ おい お たましい しゅ ほ あ 其一切治むる 處 に於て、我が 靈 よ、主を讃め揚げよ。

第142聖詠

主よ、我が祷を聆き、爾の眞實に依りて我が願に耳を傾けよ、爾の義に依りて我に聽き給へ。爾の僕と訟を爲す毋れ、蓋凡そ生命ある者は、一も爾の前に義とせられざら

しゅと、なんじのぎに依りて我に聴き給へ、爾の僕と訟を爲す母れ。

ため なんじ ぎ よ われ き たま なんじ ぼく うったえ な なか 主よ、爾の義に依りて我に聽き給へ、爾の僕と 訟 を爲す毋れ。

ニラネル タサ ニ ササレトム セ ハサ ハワ ゚゚
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連祷】 (斎調で) <楽譜は次ページ>Великие Ектениа

輔祭 我等安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

- 輔祭 上より降る安和と我等が 靈 の 救 の為に主に祷らん、
- 輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に祷らん、
- 輔祭 此の聖堂、及び信と 質と神を畏るる心とを以て此に なる者の爲に主に祷らん、
- 輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、 悉と くの教衆、及び衆人の爲に主に祷らん、
- 輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に祷らん。
- 輔祭 此の都邑とだる都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に祷らん、
- 輔祭 氣候順和、五穀豐穣、天下泰平の爲に主に祷らん、
- 輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、難難に遭ふ者、魔となりし者、及び彼等の教の 為に主に祷らん、

輔祭 我等 諸 の豪秋と忿怒と危難とを免るるが爲に主に祷らん

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを 記憶して、我等己の身及び互に「答の身を以て、 並に「悉さくの我等の生命を以て、ハリストス神に 委託せん、 (詠) 主爾に

司祭 蓋凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神。に帰す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」



【アリルイヤ】 1

輔祭 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ



輔祭 (第一句)神よ、我が神。は夜中より爾を慕ふ、蓋爾の誠は地に在りて光なり。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第二句)地に居る者は義を学べ。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第三句) 爾の民を憎む者は辱を承けん。

(詠) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

輔祭 (第四句) 主我が神よ、我等に平安を與へ給へ2。

【聖三讚詞】 (一調のみ)

舗経 我等無形の軍の有形の「徴を以て、**だ。より上なる属神。の意志に升せられ、聖三の歌に依りて ** こだいの神性の光を受けて、ヘルワィムの如く惟一の神に呼ばん、<続けて歌う>

(詠) 聖、聖、聖なる哉吾が神よ、

月: 爾が無形の軍の轉達に因りて我等を憐み給へ。

¹ アリルイヤも本来はその週の調で歌う。

²イザヤ書26章から取られた句だが、日本の祈祷書の旧訳は正教伝統の七十人訳からではなく、ロシア語聖書から訳されているために、スラブ語の句と意味が異なる。



*注:火曜日以降、2行目架線部分が以下のように変わる>

火: 爾の 前駆の祈祷に因りて 我等を憐れみ給へ。

水: 主よ、爾の 十字架の力にて 我等を護り給へ。

*: **爾の聖使徒及び成聖者ニコライの祈祷に因りて我等を<u>憐み給へ</u>。**

金: 主よ、爾の 十字架の力にて 我等を護り給へ。

誦経 光栄は父と子と聖神。に帰す。

(句) 我等衆天軍と情に最と高きに居る者に聖三の讚美を奉りて、ヘルワィムの如く呼ばん、

(詠)<u>聖、聖、聖なる哉吾が神よ、爾が諸聖</u>人の祈祷に因りて我等を<u>憐み給へ</u>。



誦経 今も何時も世世に、「アミン」

(句)至善者よ、我等語め興きて爾に伏拜す、全能者よ、天使の歌を以て爾に呼ぶ、

(詠)<u>聖、聖、聖</u>なる哉<u>吾が神よ、生神女の</u>祈祷に因りて我等を<u>憐み給へ</u>。 主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ、光栄は父と子と<u>聖神。に帰す。</u>





別冊日替わり 聖詠経

【カフィズマ(聖詠)誦読】※曜日ごとに替わる。

<カフィズマとは聖詠経の聖詠 150 篇を修道院で毎日読むために 20 個に分けたもの)各カフィズマはさらに 3 つの段(スタチア)に分けられ、間に「光栄讃詞」(「光栄は」「今も」「アリルイヤ」「主憐れめよ」「光栄は」「今も」)を挿入して読み、各段ごとにセダレン(坐誦讃詞)を読む。『大斎第一週奉事式略』では各段の聖詠を一つだけに省略し、セダレンも最後のものだけ読む。以下の通り

[第1段] (「大斎第1週奉事式略」ではかなり省略されている。網かけ内は省略されているもの)

誦経 月曜日 第4 第一段 **第24 25 26 聖詠** 火曜日 第10 **第70 71 聖詠**

水曜日 第 19 第 134 135 136 聖詠 木曜日 第 6 第 38 37 39 聖詠 金曜日 第 13 第 90 91 92 聖詠 土曜日 第 16 第 109 110 111 聖詠

誦経 「光栄讃詞」光栄は父と子と聖神。に帰す。

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」、アリルイヤ・・・(三次)、主憐れめよ(三次)光栄は

誦経 今も何時も世世に、「アミン」

[第2段] 月曜日 **第27 28 29 聖詠** 火曜日 **第72 73 聖詠**

 水曜日
 第 137 138 139 聖詠
 木曜日
 第 40 41 42 聖詠

 金曜日
 第 94 95 96 聖詠
 土曜日
 第 112 113 114 聖詠

誦経 「光栄讃詞」光栄は父と子と聖神。に帰す。

(詠) 今も何時も世世に、「アミン」、アリルイヤ・・・(三次)、主憐れめよ(三次)光栄は

誦経 今も何時も世世に、「アミン」

[第3段] 月曜日 第30 31 聖詠 火曜日 第74 75 76 聖詠

水曜日 第 140 141 142 聖詠 木曜日 第 43 44 45 聖詠

金曜日 第 97 98 99 100 聖詠 土曜日 第 115 116 117 聖詠

誦経 光栄は父と子と聖神。に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光栄は爾に帰す。 (三次) 主憐めよ。 (三次)

別冊 日替わり 三歌斎経 斎1

誦経 [セダレン] (坐誦讃詞)

光栄は父と子と聖神。に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

[生神女讚詞]

→戻る

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

第 50 聖詠

かみ なんじ おおい あわれみ より かれ あわれ なんじ めぐみ おお より かれ ふほう け たま 神よ、爾の大なる 憐に因りて我を憐み、爾が恵の多きに因りて我の不法を抹し給へ。 つね カ まえ あ われ なんじひとりなんじ つみ おか あく なんじ め まえ おこな なんじ なんじ しんだん 常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審斷 に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を 生めり。視よ、爾は心に真實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イッソ もっ bh そそ しか bhいさぎょ プ」を以て我に沃げ、然せば我 潔 くならん、我を滌え、然せば我雪より白くならん。我に さんじ たのしみ き たま しか なんじ お ほね よろこ なんじ かんばせ や つみ き 喜 と 樂 とを聞かせ給へ、然せば 爾 に折られし骨は 悦 ばん。爾 の 顔 を我が罪より避 け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改 たま ph なんじ ph なんじ ph なんじ ph と ph なんじ ph と ph なんじ サイトい はろこび ヤカト カンス しゅざい しん もっ ヤカト かた たま ヤカト ムルダ もの なんじ みち おし 教の喜を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に爾の道を教へん、 不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が教の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は なんじ ぎ ほ ぁ しゅ ゎ くちびる ひら しか ゎ くち なんじ さんび ぁ ゖだしなんし 爾の義を讃め揚げん。主よ、我が 唇 を啓け、然せば我が口は 爾の讃美を揚げん、蓋 爾 は祭を欲せず、欲せば我此を献らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔の zelv つうかい けんそん こころ かみ なんじかろ te log control of なんじ めぐみ s おん 靈 なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩を た。 たま たま そのとき なんじぎ まつり ささげもの やきまつり しょろこシオンに垂れ、イエルサリムの城垣を建て給へ。 其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜 うび饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

輔祭 神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリスティアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女・永貞童女マリヤの祷と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前駆・授洗イオアン、光榮にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神學者グリゴリイ金ロイオアン、我等の聖神父・ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・全ロシヤ

の奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、光榮なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、聖 (某) 本堂の聖人の名を擧ぐ 亜使徒日本の大主教 聖ニコライ、及び 悉 くの聖人の轉達に因りて、大仁慈の主よ、 ていました。 我等によった。 大仁慈の主よ、 でいました。 大仁慈の主ま、 なんじに求む、 我等罪人 爾 に祷る者に聆き納れて、 我等を 憐 めよ。

(詠)主憐めよ(+二次)



司祭 爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神。と情に讚揚せらる、今も何時も世世に。

(詠)「アミン」

<別冊カノンへ>

別冊 日替わり 斎2

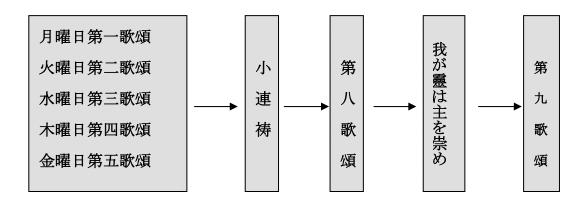
【カノン】

三歌経のカノンの仕組みの解説

-聖イオシフ及び聖フェオドルの作-

カノンは修道院で発展した複合歌。9つの歌頌(オーデ)から成る。

大齋早課のカノンは、通常のカノンと異なり、1から5歌頌までのどれかと第8歌頌、第9歌頌の三つの歌頌で構成される。最初の歌頌は曜日によって異なり、月曜日は第1歌頌、火曜日は第2歌頌・・・金曜日は第5歌頌となる。 続いて、小連祷、第8歌頌、「ヘルビムより尊く」、第9歌頌、最後に、「常に福」小連祷の旬。下図を参照。3



各歌頌は、「大斎第一週間奉事式略」に従って⁴、旧約歌頌の間に、三歌斎経のカノンのトロパリなどを挿入して行う。ただし、イルモスは第1のカノンは誦し、第2のカノンのイルモスのみを各歌頌の最後に歌うように構成されている。

³本来は、三歌経のカノンのほかに、月課経(ミネヤ)からその日の聖人(祭日)のカノンも併せて行うので、例えば、月曜日なら、第 1 、8 、9 歌頌はカノンが二つずつ、ほかの歌頌は月課経のカノンのみとなる。本来は全部歌う。つまり、冒頭の第 1 のカノンのイルモス、第 2 のカノンのイルモス、最後にもう一度第 2 のカノンのイルモスを歌う。

^{4 『}大斎第1週奉事式略』では旧約歌頌もかなり省略されている。詳しくは『連接歌集』P276 を参照。

第9歌頌イルモス(別冊)に続いて

→戻る

(詠) [常に福にして] 6調

常に福にして、全く玷なき生神女、我が神の母なる爾を讃美するは真に当たれり、ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずして神言を生みし、実の生神女たる爾を崇め讃む。



続いて

【小連祷】 (斎調で)

輔祭 我等覆数

参和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸 聖人とを記憶して、我等己の身及び互に**客*の身を以て、笄**に**悉*くの我等の生命を 以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に

司祭 蓋爾は我等の神なり、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」



【光耀歌】

1調

主よ、光をが耀かし(月)爾が無形の者の轉達に因りて、

- (火) 爾の前駆の祈祷に因りて、主よ、
- (水) 爾の十字架の力に因りて、主よ、
- (木) 爾の諸使徒及び成聖者ニコライの祈祷に因りて、
- (金) 爾の十字架の力に因りて、主よ、

我がたまいをもろまるの罪より浄めて我を救ひ給へ。

光栄は父と子と聖神。に帰す。

今も何時も世世に、「アミン」。

第 148 聖詠

天より主を讃め揚げよ、讃歌はな神神に歸す。天より主を讃め揚げよ、至高に彼を讃め揚げよ、讃歌はな神神に歸す。其悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ、讃歌は神神に歸す。日と月よ、彼を讃め揚げよ、玉さくの光る星よ、彼を讃め揚げよ。諸天の天と天より上なる水よ、彼を讃め揚げよ。主の名を讃め揚ぐべし、蓋彼言ひたれば、即成り、命じたれば、即造られたり、彼は之を立てて世世に至らしめ、則を與へて之を踰えざらしめん。地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と鬱、雪と霧、主の七之を踰えざらしめん。地より主を讃め揚げよ、大魚と悉くの淵、火と鬱、雪と霧、主のと、紫彩泉風、山と悉くの陵、果の樹と悉くの栢香木、野獣と語。の家畜、匍ふ物と飛ぶ鳥、地の諸王と萬民、牧伯と地の諸有司、少年と處女、翁とを童は、主の名を讃め揚ぐべし、蓋惟其名は高く擧げられ、其光榮は天地に徧し。彼は其民の角を高くし、其諸聖人、イズライリの諸子、彼に親しき民の榮を高くせり。〈149 聖詠省略〉

5本来はその週の調で行う。『大斎第一週奉事式略』ではすべて1調で代用している。曜日によって替わる

上まります。 かみ こうえい なんじ き されらこうえい なんじちち こ せいしん けん いま いっ まま 主我等の神よ、光榮は爾に歸す、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、「アミン」。

こうえい なんじ われら ひかり あらわ しゅ き 光榮は 爾 我等に 光 を 顯 しし主に歸す。

たれ ひび なんじ ほ ぁ なんじ な よよ ぁが うた 我日日に爾を讃め揚げ、爾の名を世世に崇め歌はん。

しゅ なんじ よよ われら かくれが 主よ、爾は世世我等の避所たり。

我曾て言へり、主よ、我を憐み、我が靈を醫し給へ、我罪を爾に得たればなり。主よ、我には此っない。なんにはれるの旨を行ふを我に教へ給へ、爾は我の神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給へ。

主よ、我等を守り、罪なくして此の日を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」。

主よ、爾の 憐 は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃 は 爾 に歸し、歌は 爾 に歸し、 光榮は 爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

【増連祷】

輔祭 我等主の前に吾が朝の 祷を増し加へん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ、

(詠)主憐めよ

輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

(詠) 主賜へよ⁶

輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の ^{たまい} に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の「終」が「ハリスティアニン」に適ひ、「疾」なく、恥なく、平安なること、及び ハリストスの畏る前き審判に於て宜しき「對をなすを賜はんことを求む、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを 記憶して、我等己の身及び互に「各」の身を以て、「並」に「悉」くの我等の生命を以て、ハリス トス神に委託せん、 (詠)主爾に

司祭 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も何時も世世に、 (詠)「アミン」

司祭 衆人に平安

(詠)爾の神。にも

輔祭 我等の 首を主に屈めん

(詠) 主爾に

司祭 蓋我が神よ、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も 何時も世世に、 (詠)「アミン」



別冊 日替わり 三歌斎経 斎3

誦経 **[挿句のスティヒラ]** (その日の)

[致命者讚詞] [生神女讚詞]

^{6 「}主賜えよ」のメロディはことばに合わせてシンプルにした。

→戻る

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

ニラネル タҕ ニ セレレム セ いま いっ ォォ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

トロパリ

生神女、天の門よ、我等爾が光榮の堂に立つに、意は天に立つが如し、祈る、我等の爲ない。
なんじ、あわれみ もん ひら たま
に爾が 憐 の門を開き給へ。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワィムより 尊く、セラフィムに 並 なく榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

 と承認とを納れ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

【聖エフレムの祝文】

司祭 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。叩拜

みさお へりくだり こらえ あい こころ われなんじ ぼく あた たま 貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。叩拜一次

鳴呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、

「アミン」。叩拜一次

かみ われざいにん きょ たま 神よ、我罪人を浄め給へ。躬拜 12 次、

上のも いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ せだこと こころ われ あた なか 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。

貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。

<早課の終わり、一時課へ>

第一時課

素た 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

また 來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

また 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第5聖詠

まま、我が言を聽き、我が思を悟れ。我が主我が神よ、我が呼ぶ聲を聽き納れ給へ、我爾に祈ればなり。主よ、是に我が聲を聽き給へ、我是に確しず前に立ちて待たん。蓋爾は不法を喜ばざる神なり、悪人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が自の前に止まらざらん、衛は凡そ不法を行ふ者を憎む、衛は、論を言ふ者を滅さん、殘忍詭譎の者は主之を悪む。惟我爾が憐の多きに倚りて爾の家に入り、爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん。主ま、我が敵の爲に我を爾の義に導き、我が前に爾の道を平にせよ。蓋彼等の口には宣賞なく、彼等の心は悪逆、彼等の喉は開けたる極、其舌にて媚び諂ふ。神よ、彼等の罪を定め、彼等をして其、謀を切て自ら敗れしめ、彼等が不虔の甚らに依りて之を述い給へ、彼等爾に逆らえばなり。凡そ爾を頼む者は喜びて永く樂み、爾は彼等を庇ひ護らん、衛の名を愛する者は爾を刺て首島的人とす。蓋主よ、衛は義人に福を降し、恵を以て盾の如く彼を環らし衞ればなり。

第89 聖詠

主ま、、爾は世世に我等の避所たり。山未だ生ぜず、、衛未だ地と全世界とを造らざる先、

「世より世までも爾は神なり。 女人でしたをからしめて白う、人の子よ、婦れと。蓋爾が

「日世より世までも爾は神なり。 女人でしたをからしめて白う、人の子よ、婦れと。蓋爾が

「日の前には、千年は過ぎし昨日の如く、夜間の更の如し。爾は大水の如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生ふる草の如し、朝には花さきて且青し、暮には刈られて稿る。蓋我等は爾の怒に因りて消え、爾の「憤」に因りて惶れ惑ふ。 爾は我等の不法を爾の前に置き、我等の隱れたる事を爾が 顔の光の前に置けり。我等が、悉くの日は爾が怒の中に

「世がらの陰れたる事を依が 前 の光の前に置けり。我等が、悉くの日は爾が怒の中に

「世がられたる事を失ふこと音の如し。我が年の數は七十年、或は 健 なれば八十年

なり、其間の社なる時も、劬勞と疾病あり、蓋其過ぐること 速 にして、我等飛び去る。

第 100 聖詠

こうえい ちち こ せいしん ** 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次 主憐めよ。三次

【一時課の讃詞】 第六の調。 (歌ふ時句毎に伏拜する)

司祭 吾が王吾が神よ、晨に我が聲を聽き給へ。

- (詠) 吾が王吾が神よ、農に我が聲を聽き給へ。
- (句) 主よ、我が言を聽き、我が思を悟れ。
- (詠)繰り返す

(句) 主よ、我爾に祷ればなり。

(詠) 繰り返す



司祭 光榮は父と子と聖神に歸す。

誦経 今も何時も世世に、「アミン」。

鳴呼恩寵に滿たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を照したればなり、樂園とせん、爾枯れざる花を開きたればなり、童貞女とせん、爾貞操を壊らざればなり、浄き母とせん、爾聖なる懷に萬物の神たる子を抱きたればなり、彼に我等の 動物 の教はれんことを祈り給へ。



至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖 なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

月曜日、火曜日、木曜日 ※曜日で替わる

我等黙さず心と口にて聖なる天使よりも聖にして、至りて光榮なる神の母を歌ひ、之を承け認めて生神女と爲す、其實に人體を取りし神を生みて、恒に我等の靈の爲に祷り給へばなり。

水曜日、金曜日 ※曜日で替わる

ハリストス吾が神よ、疾く先んじて、爾を誹り、我等を阻める敵の我等を 擄にするを許す かれる しゅうしゅ しょうしんじょ できなが できない なんじ の 大きりひと かい なんじ の 大きりひと ない なんじ の 十字架を以て、我等と 戦 ふ敵を でし、彼等に 正教 の者の信が如何なる 能 あるを悟らしめ給へ。

主憐めよ。十二次

しゅあわれ 主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん ** 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワィムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が 顔 を以て我等を照し、並に我等 を 憐 み給へ。

誦経「アミン」。

司祭【聖エフレムの祝文】

かみ われざいにん きょ たま 神よ、我罪人を浄め給へ。 (叩拝 12 次)

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる毋れ。貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを給へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

司祭 真の光なるハリストス、凡そ世に來る人を照し且聖にする者よ、願はくは爾がかんばせのかりなれる。 大きになりて近づき難き光を見るを得ん、願はくは爾が変している。 大きになりて近づき難き光を見るを得ん、願はくは爾が至上では、一般によりの母と、爾が諸聖人の祈祷に因りて、我等の足を爾の戒を行ふに向はしめ給へ、(詠)「アミン」。





司祭 ハリストス神、我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

(詠) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」。主憐め、主憐め、主憐めよ。 福を降せ。



司祭 【發放詞】

ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母の祈祷と、無形なる尊き天軍、光樂にして讃美たる聖使徒、聖(某)本堂及び本日聖人、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

(詠) 「アミン」<一時課で終わる場合は万寿詞を歌う>

かみ ない てんのうおよ くに つかさど もの われら ふしゅきょう 神よ、我が国の天皇及び国を 司 る者、我等の府主教ダニイル、及び 悉 くの 正教 の「ハリスティアニン」等を幾歳にも護り給へ。

第三時課

<三時課から始める場合はここから>

司祭 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。

誦経者誦す、「アミン」。

表に かみ こうえい なんじ き こうえい なんじ き 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

てん おう なぐさ もの しんじっしん あらざる所なき者、滿たざる所なき者よ、萬善の寶藏 なる者、生命を賜ふ主よ、來りて我等の中に居り、我等を諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救ひ給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

しせいさんしゃ かれら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち ゆる せい 至聖三者よ、我等を 憐 め、主よ、我等の罪を 潔 くせよ、主宰よ、我等の 愆 を赦せ、聖 もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんじ な よ なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給へ、 悉 く 爾 の名に因る。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

てんといますれた。からない、顔はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経「アミン」。

主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

<一時課から続けるときはここから>



また たれら おう かみ まえ こうはい かふく 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第16聖詠

第24聖詠

まま、、ていていた。 これでは、 これでは、

して苦めらるるに因る。我が心の憂益多し、我が苦難より我を引き出せ、我が困苦、我が困苦、我が労瘁を顧み、我が諸の罪を赦し給へ。我が敵を觀よ、何ぞ多き、彼等が我を怨む恨みは何ぞ甚しき。我が靈を護りて我を救ひ、我が爾に於ける恃に愧なからしめ給へ。

第50聖詠

かみ なんじ おおい あわれみ よ の で は かれ あわれ なんじ めぐみ おお の 大 なる 憐 に因りて我を憐み、爾 が 恵 の多きに因りて我の不法を抹し給へ。 つね ゎ まえ ぁ われ なんじひとりなんじ つみ おか ぁく なんじ ゅ まえ おこな なんじ なんじ しんだん 常に我が前に在り。我は爾獨爾に罪を犯し、悪を爾の目の前に行へり、爾は爾の審断 に義にして、爾の裁判に公なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を 生めり。視よ、爾は心に真實のあるを愛し、我が衷に於て智慧を我に顯せり。「イッソ プ」を以て我に沃げ、然せば我 潔 くならん、我を滌へ、然せば我雪より白くならん。我に さい たのしみ き たま しか なんじ お ほね よろこ なんじ かんばせ ゎ つみ き 喜 と 樂 とを聞かせ給へ、然せば 爾に折られし骨は 悦 ばん。爾 の 顔 を我が罪より避 け、我が盡くの不法を抹し給へ。神よ、潔き心を我に造れ、正しき靈を我の衷に改 サイトい はるこび ヤネル カシネ しゅさい しん もっ ヤネル カヒ ヒル ヤル ルヒ トロ トロ もの なんじ みち キレ 牧 の 喜 を我に還せ、主宰たる神を以て我を固め給へ。我不法の者に 爾 の道を教へん、 不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が教の神よ、我を血より救ひ給へ、然せば我が舌は なんじ ぎ ほ ぁ しゅ ねっくちびる ひら しか ねっくち なんじ さんび ぁ けだしなんじ 爾の義を讃め揚げん。主よ、我が 唇 を啓け、然せば我が口は 爾の讃美を揚げん、蓋 爾 は祭を欲せず、欲すれば我之を獻らん、爾は燔祭を喜ばず。神に喜ばるる祭は痛悔 の 靈 なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾輕んじ給はず。主よ、爾の恵に因りて恩 た とう とう とう とう とう とう とう とう とう まっり さきげもの やきまつり をシオンに垂れ、イエルサリムの 城垣 を建て給へ。 其時に 爾 義の 祭 、 獻物 と 燔祭 とを よろこ う そのとき ひとびとなんじ さいだん こうし そな 喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠へんとす。

こうえい ちゃ こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次 主憐めよ。三次

<カフィズマ省略、月7,火-14、水3、木10、金19、第5週は月7、火15、水4、木9、金19>

【三時課の讃詞】第六の調。

(詠) 同上繰り返す

(句) 神よ、 潔 き 心 を我に造れ、正しき **靈** を我の衷に 改 め給へ。

(詠) 同上繰り返す

- (句) 我を爾の顔より逐ふこと毋れ、爾の聖神を我より取り上ぐること毋れ。
- (詠) 同上繰り返す (歌ふ毎に伏拜)



司祭 光榮は父と子と聖神に歸す。

生神女よ、爾は實の葡萄の枝、我等の爲に生命の果を結びし者なり、女宰よ、爾に祈る、世間ととと、古のは、我等の爲に生命の果を結びし者なり、女宰よ、爾に祈る、世間とと、其に我が靈の憐を蒙らんことを祈り給へ。

主は日日に崇め讃めらる。神は我等に重荷を負はすれども、亦我等を救ひ給ふ。神は我等の ため、すくい、かみ 為に、救の神なり。

上崎かりは、三次

こうえい ちち こ せいしん ま いま いっ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

誦経 「アミン」。

こうえい ちち こ せいしん き 光榮は父と子と聖神に歸す。

イイススよ、我等の靈の悶ゆる時、速にして真なる慰を爾の諸僕に與へ給へ、憂の時我等の靈を離るる母れ、禍の時我等の心に遠ざかる勿れ、恒に我等を衞り給へ。我等に近づけ、在らざる所なき者よ、近づけよ、恩廣き者よ、常に爾の使徒と偕に在るが如く、我等爾を恃む者と偕にし、我等に同一にして爾を歌ひ、爾が至聖の神を讃樂せしめ給へ。

今も何時も世世に、「アミン」。

至浄なる生神女よ、爾は「ハリスティアニン」等の憑恃と轉達なり、避所と壊れざる城なり、弱れる者の爲に風なき湊なり、讃樂せらるる童貞女よ、爾は息めざる祈祷にて世を救ふ者なるを以て、我等をも記憶し給へ。

主憐めよ。十二次

の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其 園 に 備り 導 かれて、信の一なると 爾 の近づき 難き光榮を悟るに至らせ給へ、 蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、「アミン」。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ ょょ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾が 顔 を以て我等を照し、並に我等 を 憐 み給へ。

誦経「アミン」。

【エフレムの祝文】

司祭 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。叩拜一次 ^{みさお} 貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。叩拜一次

鳴呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる「アミン」。叩拜一次

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

記録
 記述
 記述

第六時課

また、 かれら おう かみ こうはい 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

**た ない かんら おう かみ こうはい かふく 來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第 53 聖詠

神よ、爾の名を以て我を救ひ、爾の力を以て我を判き給へ。神よ、我が祷を聽き、我が同の言を聆き納れ給へ、蓋外人は起ちて我を攻め、強き者は我が靈を覚む、彼等は神をおの前に置かず。視よ、神は我の援助なり、主は我が靈を固め給ふ。彼は我が敵に其悪を報いん、爾の眞實を以て彼等を滅し給へ。主よ、我心を盡して爾に祭を獻げ、爾の名を讃め揚げん、其善なるを以てなり、蓋爾は我を諸の艱難より救ひ給へり、我が目は我の敵を見たり。

第 54 聖詠

論よ、我が祷を聆き我が願より匿るる母れ。我に耳を傾けて我に聽き給へ、我は悲かの中に神ひ、敵の聲、不虔者の贄に由りて擾ふ、蓋被等は不法を以て我を誣ひ、怒を以て我に流っ、我が心は我の我に慄き、死の恐惶は我に发べり、驚懼と戰栗とは我に臨み、恐惶は我を歯めり。我言之り、孰か我に鵠の翼を予ふるあらん、我飛び去りて妄を獲ん、遠く離れて野に居らん、為ぎて旋風と暴風とを避けん。主よ、被等を亂し、其の舌を分けよ、蓋我は暴虐と争競とを城邑の中に見る、被等は晝夜其の城垣の上を繞る。其中に毒悪と悪難あり、殘害は其中にあり、詭詐と誑騙とは其衛を離れず。我を誇る者は敵に非ず、敵ならば我之を忍ばん、我に高ぶる者は我が仇に非ず、仇ならば我之を避けん、光方が確嘗て我と傷しき者、我の友、我の近き者たり、我と親しきが診を爲しし者、偕に祥の宮に行きしると。 顧はくは死は彼等に至らん、顧はくは彼等は生きながら地獄に降らん、悪事は其佳所に、其間に在ればなり。惟我神に飆ばん、主方我を救はん。晚と輸と年に我祈りて續ばん、彼方時我の聲を聞かん、我が意。を我を攻むる者より平安に脱れしめん、彼等事をしければなり。神は聴かん、世の前より在す者は彼等を卑くせん、蓋彼等に改新なし、彼等中は神を襲れず、心の手を彼等と和睦する者に伸べ、心の約に背けり、其には意より滑らかにして、其心に仇を懐き、其言は流声と楽人のにして、是れ首为なり。簡の重任を主

に負わしめよ、彼は爾を挟けん。彼は何時も義人に撼くを容さざらん。神よ、なば、ないない。 は彼等を滅の阱に陥れん、血を流し、 貳 を行ふ者は生きて其日の半にも至るを得ず。主よ、 ただわれなんじ、たの 惟我爾を頼む。

第90聖詠

至上者の覆いの下に居る者は、全能者の蔭の下に安かず、まに謂う、確は我の避所、我の遊所、我の驚異、我が頼む所の我の神なりと。彼は爾を獵者の網より、滅亡の変より脱れしめん、彼は其羽にて爾を覆わん、其翼の下にて爾危からざるを得ん、彼の眞實は楯なり、鎧なり。爾は夜の震驚と晝の流矢、闇冥に行く「行疫」と正午に暴す瘴疫を懼れざらん。千人衛の側に、萬人爾の右に作るとも、爾に近づかざらん、爾只目を注ぎて不虔の者の報を見ん、蓋爾謂へり、主は我の恃なりと、爾至上者を擇びて、爾の避所と爲せり。悪は爾に臨まず、疫癘は爾の住所に近づかざらん、蓋爾の是を石に蹶かざらしめん。彼等其手にて爾を抱へて、爾の是を石に蹶かざらしめん。彼称と毒蛇とを踐み、獅と大蛇とを蹈まん。彼我を愛するに因りて、我之を援けん、彼我を愛するに因りて、我之を衝らん。我を呼ばば、我彼に聽かん、憂の時我彼と情にし、彼を援け、彼を樂せん、壽考を以て彼に飽かしめ、我の教を彼に顯さん。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次 上ゅぁゎゎ 主憐めよ。三次

<カフィズマ省略、月8、火15、水4、木11、金20、第五週は月8、火16、水5、木10、金20>

【六時課の讃詞】第二の調。<楽譜次ページ>

(詠)繰り返す

(第一句) 神よ、我が 祷 を やき、我が 願 より 匿るる 母れ。

(詠)繰り返す

(第二句) お神に籲ばん、主 乃 我を救はん、

(詠)繰り返す (歌ふ毎に我等一次伏拜す)



司祭 光榮は父と子と聖神に歸す。

誦経 今も何時も世世に、「アミン」。

生神・童貞女よ、我等 夥 しき罪ありて、己 に 勇 なきに因りて、爾 より生れし者に祈り たま 合の 祷 は多く主宰の慈憐を得べし、至浄の者よ、罪人の 祈 を棄つる勿れ、我等 の為に甘んじて 苦 を受け給ひし者は仁慈にして人を救ふことを能すればなり。

別冊 日替わり 三歌斎経 斎4

- ◆預言のトロパリ
- ◆ポロキメン
- ◆イサイヤの預言書の読み(受難週はイエゼキイリの預言書、使徒経、福音経)

→戻る

誦経 主よ、願はくは爾の慈憐は速に我等を迎へん、我等甚衰へたればなり、神我等の教世主よ、爾の名の光榮に因りて我等を助け給へ、爾の名に因りて我等を救ひ、我等の罪を浄め給へ。

聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

しゅあわれ 主憐めよ。三次

ニラネル タҕ ニ セレレム セ いま いっ ォォ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

トロパリ、第二の調、

ハリストス神よ、爾は地の中に 救を施し、爾が至浄の手を十字架に伸べて、主よ、光榮は爾に歸すと呼ぶ萬民を集め給へり。

光榮は父と子と聖神に歸す、

仁慈なるハリストス神よ、我等爾の至浄なる聖像に伏拜して、我が諸罪の赦を求む、蓋 なんじ そのつく しもの てき の奴隷より救はん為に、甘じて身にて十字架に升り給へり。故に我等爾は其造りし者を敵の奴隷より救はん為に、甘じて身にて十字架に升り給へり。故に我等が此ばして爾に呼ぶ、世界を救はん為に來りし我が救世主よ、爾は衆人を欣喜に満て給へり。

今も何時も世世に、「アミン」。

月、火、土曜日 生神女讃詞

芝味ん いずみ しょうしんじょ われら あわれみ た つみ ひとびと かえり なん こと なんじ ちから 落憐の泉なる 生神女 よ、我等に 憐を 垂れ、罪なる人人を顧みて、恒の如く 爾の力を 類 し給へ。 蓋 我等は爾を恃み、天軍首ガウリイルに倣ひて爾に呼ぶ、慶べよ。

水、金曜日 十字架生神女讃詞

讃栄せらるる生神童貞女よ、我等爾を歌ふ、爾の子の十字架にて地獄は破られ、死は亡され、 殺されし者は興きて生命を得、古に復りて地堂の福樂を受けたり、故に我等ハリストス吾が神に感謝して、其權能ありて仁慈なるを讃栄す。

主 憐 めよ。 十二次(本来は 40 次)

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

誦経「アミン」。

【聖エフレムの祝文】

司祭 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。叩拜

又躬拜すること 12 次、毎次黙誦して曰く、

かみ われざいにん きょ たま 神よ、我罪人を浄め給へ。

後再全文を誦す、

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次

誦経【祝文】

神、天軍の主、萬物の造成者、爾が量り難き仁愛、慈憐を以て我が族を救はん爲に、爾の獨生子吾が主イイススハリストスを遭し、其貴き十字架にて我等の罪の書券を破り、文をしていて間冥の首領と權柄とに勝ちし至仁なる主宰よ、我等罪なる者の此の感謝と祈願との祷を納れて、諸害を爲す暗き罪、及び凡そ我等を殘はんと欲する見ゆる又見えざると、我節より我等を救ひ給へ。我が體を爾を畏るる思に釘うち給へ、我が心を邪なる言意なは思に傾かしむる勿れ、乃爾を愛する愛を以て我等の光を刺して、我等に常にない。 おりする光に導かれて、爾近づき難き永存の光を望み、爾無原の父、衛爾の獨生の子、及び至聖至仁生を施す神に斷えず讚詠と感謝とを奉らしめ給へ、今もで時も世世に、「アミン」。

第九時課

また われら おう かみ こうはい 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

**た かれら おう かみ こうはい をふく 來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

**た 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第83 聖詠

第 84 聖詠

主ま、衛は世にが体を確の地に施し、イアコフの停を歸せり、衛の民の不法を赦し、其凡ての罪を掩ひ、爾が悉くの念を罷め、爾が怒の烈しきを除き給へり。我が救のが強よ、我等を起し、爾が我等に於ける。憤を釋き給へ。豊永く我等を忿り、爾の怒を世世に伸べんとするか、豊新に我等を活かして、衛の民に衛の事を悦ばしめざらんとするか。主よ、爾の峰を我等に顯し、爾の教を我等に施し給へ。我は主神の言はんとするが、主よ、爾の峰を我等に顯し、衛の教を我等に施し給へ。我は主神の言はんとする所を聽かん、彼は平安を其民と其選びし者に謂はん、唯願はくは彼等は「再無智に陥らざらん。此くの如く彼の教は彼を畏るる者に適し、光榮の我が地に居らん爲なり。慈憐としならん。此くの如く彼の教は彼を畏るる者に適し、光榮の我が地に居らん爲なり。慈憐としなり、義と和平と相接吻せん、眞實は地より出で、義は天より臨まん、主は、幸福を與へ、我が地は其果を與へん、義は彼の前に行き、其足を路に立てん。

第 85 聖詠

たました。なんじ、みみ、かたが、しかし、きゃんたま、かれとぼ、 主よ、爾の耳を傾けて我に聽き給へ、我乏しくして貧しければなり。我が靈を護れ、我 でいる。 また、我を憐め、我が神よ、爾を恃める爾の僕を教ひ給へ。 まよ、我を憐め、我も皆られて呼べばなり。 では、我が神よ、不可を与るを誓しましめ給へ、まよ、我が霊を育に事ぐればなり、一般に呼べばなり。 では、我が夢とない。 まま、我が夢といる。 まま、我が夢といる。 まま、我が夢といる。 まま、我が夢といる。 まま、我が夢らといる。 まま、我が願の聲を聆き納れ給へ。我が憂の自に確に呼ぶ、爾我に聴かんとすればなり。 まま、諸神の中爾に如く者なく、爾の作為に如くはなし。 まよ、不可に造られし萬民は來りて爾の前に伏拜し、爾の名を讃楽せん、 蓋爾は大にして、奇蹟を行ふ、衛神よ、衛の名を妻るる妻に固め給へ。 ま我が神よ、我心を蓋して何を讃美し、永く何の名を讃楽せん、 蓋爾は大にして、奇蹟を行ふ、衛神の名を妻るる妻に固め給へ。 ま我が神よ、我心を蓋して何を讃美し、永く何の名を讃楽せん、 蓋爾は大にして、奇蹟を行ふ、 衛神よ、獨の名を妻るる妻に固め給へ。 まれが神よ、我心を蓋して何を讃美し、永く何の名を讃楽せん、 蓋爾は大にして、 奇蹟を行かる、 衛神の名を妻るる妻に固め給へ。 まれが神よ、我では我が霊を甚と深き地獄よりな好け給へ、り。神よ、驕る者は起ちて我を攻め、暴虐者の黨は我が霊を尋ぬ、彼等は爾をお己のの後を我に顧し給へ、物と、「愛」の後を我に顧し給へ、「愛」の後を我に顧し給へ、「愛」の後を我に顧し給へ、「教を疾む者は之を見て為に愧を得ん、「彼」と、我を助け、我を慰め給ひしに因る。

こうない ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次 「たいまたれ 主憐めよ。三次

【九時課のトロパリ】第八の調。 <楽譜次ページ>

だいくに おれら ため み こし な 第九時に我等の為に身にて死を嘗めしハリストス神よ、我が肉體の念を殺して、我等を救ひ給へ。 (詠)繰り返す

司祭第一句 主よ、願はくは我が籲聲は爾が顔の前に邇づかん、爾の言に循ひて我を悟せら給へ。 (詠)繰り返す

おが またいのり なんじ かんぱせ まえ いた なんじ ことば したが われ すく たま 司祭第二句 願はくは我が祷は爾が顔の前に至らん、爾の言に循ひて我を救ひ給へ。

(詠)繰り返す

右歌ふ毎に我等一次伏拜す。



司祭光榮は父と子と聖神に歸す。

編経 今も何時も世世に、「アミン」。

我等の爲に童貞女より生れ、十字架に釘うたるるを忍び、神なるに依りて死にて死を滅し、 なっかっをあらわしし仁慈なる主よ、爾の手にて造りし者を棄つる勿れ、慈憐の主よ、爾が人を 愛する愛を顯して、我等の爲に祈祷する所の爾を生みし生神女を受け給へ、我が教主 よ、望を失へる人人を救ひ給へ。

であるに因りて我等を終まで棄つる勿れ、爾の盟約を破る勿れ、爾の憐を我等より除く勿れ、爾が愛する所のアウラアムと、爾の僕イサアクと、爾の聖なるイズライリとに因りてなり。

型なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

全聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖 なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

しゅあわれ 主 憐 めよ。三次

ニラネネレ タ⁵ ニ サャントム セ いま レシッ メ゚。 メ゚ 犬栄は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

てん いま かれら から と 、 顧はくは 爾 の名は聖とせられ、 爾 の國は來り、 爾 の旨は天に 行 は るるが如く地にも 行 はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に 債 ある者を我等 免すが如く、我等の 債 を免し給へ、我等を 誘 に 導 かず、 猶我等を 凶悪 より救ひ給へ。

司祭 蓋 國と權能と光榮は 爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。 誦経 「アミン」。

とうぞく いのち かしら だゅうじか かか かか となる といっり、我等と共に釘うたれし者は、若し身を取 としかない。 から が十字架に懸れるを見て日へり、我等と共に釘うたれし者は、若し身を取りし神に非ずば、日は其光線を隱さず、地も戰ひ慄かざらん、萬の事を忍ぶ主よ、爾の ないにないて我を憶ひ給へ。

光栄は父と子と聖神に帰す、

なんじ、できずじか、からない。とうぞくの盗賊の間に在りて義の權衡と為れり、一人は誇の重きを以て地獄に 本で、できり、一人は夢の重きを以て地獄に なだ。 降され、一人は罪を釋かれ輕くせられて、神學の智識に昇せられて、ハリストス神よ、光榮 は爾に歸すと讃揚するを悟れり。

今も何時も世々に、「アミン」。

主憐めよ。十二次

しゅあわれ 主憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワィムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾の 顔 を以て我等を照し、並に我等 を 憐 み給へ。

誦経「アミン」。

【聖エフレムの祝文】

司祭 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる毋れ。叩拜

誦経 【祝文】

主義なイイススハリストス吾が神よ、我等の罪を寛忍して、我等を今の時に至らしめ給ひしまよ、昔此の時に生命を施す木に懸りて、善智なる盗賊の爲に天堂の道を啓き、死を以て死を滅し給ひしまよ、我等罪なる衝の當らざる僕を浄め給へ、我等罪を犯し、不法を持つ、同を擧げて天の高きを見るに堪へざればなり、蓋爾の義の道を離れ、私慾を恣意にして自を送れり。主よ、爾の量り難き仁慈に祈る、爾が多くの憐に因りて我等を有め、葡萄型なる名に因りて我等を教ひ給へ、我が日空しく消ゆればなり。我等を敵の手より援け給へ、我等が諸の罪を赦し給へ、我等が肉體の念を殺し給へ、我等舊き人を脱ぎ、新しき人を衣、衛我等の主宰及び恩者の爲に生き、此くの如く衛の誠。に遭ひて、意意くの樂しむ者の住所なる永遠の多な私に至らん爲なり。蓋ハリストス吾が神よ、爾は實に衛をを愛する者の負の強とと言なり、我等確と、爾の無原の父と、至聖至仁生命を施す葡の神とに光榮を歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ティピカ 聖体礼儀代式

【眞福詞】第八の調(8調と記載があるがなぜか楽譜は6調)

主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。

神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。

「附唱」主よ、爾の國において我等を憶ひ給へ。



く以下同様に>

 主よ、爾の國に於て我等を憶ひ給へ。叩拜一次 〈楽譜下〉 主宰よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。叩拜一次 主宰よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。叩拜一次 型なる者よ、爾の國に來らん時我等を憶ひ給へ。叩拜一次



誦経、天軍爾を歌ひて日ふ、聖、聖、聖なる哉主サワオフ、爾の光榮は天地に編し。
(句) 目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。

てんぐんなんじ うた アエー・ なんじ こうえい てん ち しゅまれ しゅう でん こうえい でん ち しゅ しゅう でん でんなんなんじ こうえい てん ち しゅまれ し。 なんじんなんじ うた アエー・ 変し 要、聖なる哉主サワオフ、爾の光榮は天地に編し。

光栄は父と子と聖神に帰す。

世いてんし およ てんし せれ しゅうてんぐん とも なんじ うた い せい せい せい かなしゅ 聖天使及び天使首の群は衆天軍と共に爾を歌ひて曰ふ、聖、聖、聖なる哉主サワオフ、爾の光榮は天地に徧し。

今も何時も世々に、「アミン」。

信經

我信ず、一の神、父、全能者、天と地、見ゆると見えざる萬物を造りし主を。又信ず一の主イイスス・ハリストス、神の獨生の子、萬世の前に父より生れ、光よりの光、真の神よりの真の神、生れし者にて、造られしに非ず、父と一體にして、萬物彼に造られ、我等人人のため、又我等の教の爲に天より降り、聖神及び童貞女マリヤより身を取り、人となり、我等の

たいでは、こうないでは、いっというにはいっというでは、いっというないでは、こうないでは、一つないでは、こうないで

てんといますれた。からない、顔はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦経 「アミン」。

曜日で替わる コンダク

月曜日 神の天軍首、神聖なる光榮の役者、諸天使の首、人人の教導者よ、我等の爲に益あることと大なる憐とを求め給へ、爾等は無形の軍の首なればなり。

水曜日 甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の めぐみ た たま なんじ ちから もって吾が国を樂しませ、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平 の武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

金曜日 甘んじて十字架に擧げられしハリストス神よ、爾が同名の新なる住所に爾の

恵を垂れ給へ、爾の力を以て吾が国を樂しませ、其諸敵に勝たしめ給へ、彼は爾が和平の武器、勝たれぬ勝を以て其助とすればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、

ゝゝ。 今も何時も世世に、「アミン」。

「ハリスティアニン」等の辱を得ざる轉達、造物主の前に變らざる中保よ、罪なる者の祷
の聲を斥くる勿れ、仁慈なるに依りて速に我等を助け給へ、蓋我等切に爾に呼ぶ、
生神女よ、爾を尊む者に常に代りて、急ぎて祷り、切に求め給へ。

主憐めよ。三次

ニラネル タҕ ニ サハレル セ ハサ ハヮ ォォ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

ヘルワイムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讃む。

せんぷ しゅ な もっ ふく くだ 神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾が 顔 を以て我等を照し、並 に我等 を 憐 み給へ。

誦経「アミン」。

[聖エフレムの祝文]、

司祭 主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。叩拜

又躬拜すること 12 次、毎次黙誦して曰く、

かみ われざいにん きょ たま 神よ、我罪人を浄め給へ。

後再全文を誦す、

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。嗚呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讃めらる、「アミン」。叩拜一次嗣ぎて晩課式を行ふ。

月、火、木 先備聖体礼儀のない時→ P71

水、金、受難週の月、火、水、詮議聖体礼儀のある時→ P49

先備聖体礼儀があるとき 大斎の水金と受難週の月火水

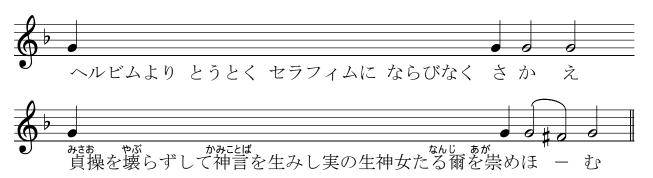
輔祭 睿智

つね さいわい まった きず しょうしんじょ わ かみ はは なんじ さいわい とな まこと あた (詠) 常に 福 にして全 く玷なき生神女、吾が神の母なる爾 を 福 なりと稱ふるは眞 に當れり、



司祭、至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ

(詠) ヘルワィムより尊くセラフィムに並びなく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の生神女た る爾を崇め讃む。



司祭、ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

(詠) 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。主憐め、主憐め、主憐めよ。 福を降せ。



司祭【發放詞】ハリストス我等の真の神は、其至浄なる母の祈祷と、生命を施す尊き十字架の力と、光榮にして讃美たる聖使徒、聖(某)本堂及び本日聖人、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて、我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

(詠) アミン、主憐め、主憐め、主憐めよ。



<晩課に続く>

晩課 (先備のある時)

輔祭 君よ、祝讃せよ。

司祭 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」。

誦経、

また、 かれら おう かみ こうはい 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

また 來れ、ハリストス我等の・神に叩拜俯伏せん。

また 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

首誦聖詠

我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光榮と威嚴とを被 れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾 の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焔を以て爾の役者と これ、おお、 でき いただき みず た なんじ おどし よ こ はし なんじ いかづち こえ よ ことを覆へり、山の 巓 に水立つ。 爾の恐嚇に依りて此れは奔り、 爾の 雷の聲に由りて こなえざらしむ、反りて地を覆わざらん。爾は泉を澗に遣せり、山の間に水は流れ、野の スラセス けもの の の シさぎショ そのかわき とど そら とり そのかたわら す ネだ あいだ こえ 諸 の獣に飲ましむ、野の 驢 は其渇を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を いだ なんじ うぇ みや やま うるぉ ち なんじ わざ み あ た なんじ くき けもの出す。爾は上なる宮より山を潤し、地は爾の造工の果にて饜き足れり。爾は草を獸の ため しょう いだ ひと もとめ ため しょう ち しょくもつ いだ さけ ひと こころ 為に 生ぜ しめ、野菜を人の 需 の為に 生ぜ しめて、地より 食物 を出さしむ。 酒は人の 心 たのし あぶら その おもて うるお パン ひと こころ やしな しゅ ま そのう はくこうぼく を 樂 ませ、膏 は其の 面 を 澤 し、餅は人の 心 を 養 ふ。主の樹、其植えたるリワンの栢香木 た とり そのうえ す つく まつ つる すみか たか やま しか ため いわお うきぎ ため は 優き足れり、鳥は其上に巣を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は 兎 の爲 たいない ところ しゅ つき つく とき きだ ひ そのい ところ し なんじくらやみ し すなわちょ に避所たり。主は月を造りて時を定め、日は其入る處を知る。爾 暗 を布けば、則 夜あ り、其時林の獸皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等 ^{あつま おのれ あな ふ ひと その わざ ため い ぱたら くれ いた しゅ なんじ しわざ なん 集 りて 己 の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞 きて暮に至る。主よ、爾 の工業は何ぞ} は無数の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中 あそ かれら みななんじ とき したが しょく あた ま これ あた う なんじ て に游ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ が $^{\text{to}}$ が $^{\text{to}}$ が $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ が $^{\text{to}}$ に $^{\text{to}}$ る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願はくは光榮は世世に主に在ら ねが しゅ おのれ わざ ため たのし かれち み ちふる やま ふ けむりたん、願はくは主は己の造工の爲に樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙起 つ。我生ける中主に歌ひ、世を終るまで我が神に歌わん。願はくは我が歌は彼に悦ばれん、 我主の爲に樂まん。願はくは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈よ、 主を讃め揚げよ。

ニラネル タラ ニ サルレム セ ハサ ハー ゚゚゚
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連祷】

輔祭 我等安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 上より降る安和と我等が 靈 の 救 の爲に主に祷らん、

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に祷らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と 質 と神を畏るる心とを以て此に 菜る者の爲に主に祷らん、

輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに内る輔祭職、 悉 くの教衆、及び衆人の爲に主に祷らん、

輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に祷らん。

輔祭 此の都邑と** 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に祷らん、

輔祭 氣候順和、五穀豐穣、天下泰平の爲に主に祷らん、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、難難に遭ふ者、虜となりし者、及び彼等の教の 為に主に祷らん、

輔祭 我等^もえまるの うないと なったと を発起 と を 免るる が 爲に主に 祷らん

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを 記憶して、我等己の身及び互に「各」の身を以て、「並」に「悉」くの我等の生命を以て、ハリストス神に 委託せん、 (詠)主爾に

司祭 蓋凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神。に帰す、今も何時も世世に、 (詠)「アミン」



第18「カフィズマ」 <至聖所での準備にあわせて適宜省略のこと>

第 119 聖詠

我我が憂の中に主に呼びしに、彼我に聽き給へり。主よ、我が靈を詭詐の口、欺騙の舌より免れしめ給へ。欺騙の舌は何を以て爾に予へ、何を以て爾に加へんか、勇者の鋭き箭なり、金雀枝の蒸炭なり。、哀い哉、我モソフに寓り、キダルの幕の旁に住む。我が靈は和睦を疾む者と偕に久しく住めり。我和を好む、然れども我言を出せば、彼等戰を興す。

第 120 聖詠

我自を擧げて山を望む、我が助は彼處より來らん。我が助は天地を造りし主より來る。彼は爾の足に躓くを許さざらん、爾を守る者は眠らざらん。イズライリを守る者は眠らず、海はず。主は爾を守る者なり、主は爾の右の手の庇蔭なり。晝に日は爾を傷めざらん、なんじを持ちる。本語を告める。主は爾を諸の右の手の庇蔭なり。一旦は本人に表情を傷めずらん、なんじを持ちる。本語の右の手の庇蔭なり。一旦は一個ないに表情を傷めずらん、なんじない。 またしかり。 主は爾を諸の福より守らん。 主は爾の出入を守りて世世に至らん。

第121 聖詠 登上の歌。ダワィドの作。

人我に向ひて、我等主の家に往かんと云ふ時、我喜べり。イエルサリムよ、我等の足は爾の門の内に立てり。イエルサリムは稠密の城邑の如くに築かれ、諸支派即主の支派がイズライリの法に遵ひて、上りて主の名を讃樂する處なり。彼處に審判の寶座、ダワィドの家の寶座は立つ。イエルサリムの爲に平安を求めよ、願はくは爾を愛する者は安寧を得ん。種がはくは爾の城の中は平安、爾の宮の中は安寧ならん。我は我が兄弟、我が隣の爲に云ふ、爾平安なれ。主我が神の家の爲に我爾に福を願ふ。

第 122 聖詠

てた だっ もの よ 、我自を舉げて 爾を望む。 視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望みて、其我等を 憐 むを俟つ。主よ、我等を 憐 み、我等を 憐 み、我等を 憐 み給へ、蓋 我等は 悔 に魘き足れり。我等の 靈 は驕る者の 辱 と誇る者の 侮 とに魘き足れり。

第122 聖詠 登上の歌。ダワィドの作。

イズライリ云ふべし、若し主我等と情にあらず、人人起ちて我等を攻めし時、若し主我等と情にあらざりしならば、彼等が我等に於ける怒は燃えて、彼等は我等を生きながら呑みしならん、水は我等を沈め、流は我等の「靈」の上を過ぎ、暴れたる水は我等の「靈」の上を過ぎしならん。我等を算って其歯の獲物となさざりし主は崇め讃めらる。我等の「靈」は脱れしこと、鳥が捕ふる者の羅を脱るるが如し、羅製かれて我等脱れたり。我等の扶助は天地を造りし主の名に在り。

ニラネル タサ ニ サヤレレム セ ハサ ハワ ゚ポ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【小聯祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠) 「アミン」



第 124 聖詠 登上の歌

主を頼む者はシオン山の如く動かずして欹く存す。諸山はイエルサリムを環り、主は其民を環りて今より世世に迄らん。蓋主は悪者の杖に、義者の業の上にあるを許さざらん、義者が其手を不法に伸べざらん爲なり。主よ、恩を善人と心の直き者とに施し給へ、己の曲徑に轉ずる者に至りては、願はくは主は彼等に不法を行ふ者と偕に行くを許さん。願はくは

第 125 聖詠 登上の歌

主がシオンの講を返しし時、我等夢みるが茹くなりき、其時我等の白は樂にて盈ち、我等の舌は歌にて滿ちたり、其時諸民の中に云へるありき、主は彼等に大なる事を行へりと。主は我等に大なる事を行へり、我等喜べり。主よ、我等の擄を南方の流の茹くに返し給へ。なが、を以て播く者は、喜を以て穫らん。泣きて種を攜ふる者は、歡びて其禾束を攜へて歸らん。

第 126 聖詠

者し主家を造らずば、造る者徒に勞し、若し主城を守らずば、守る者徒に儆醒す。爾等徒に夙に興き、遅く寝ね、憂の餅を食ふ、時に彼は其愛する者に寝ぬるを賜ふ。視よ、主が興ふる所の業は諸子なり、其褒賞は腹の果なり。少壮の諸子は、勇者の手にある箭

の如し。此を其箙に充てたる者は福かり、彼等門の内に在りて敵と共に言ふ時、羞を得ざらん。

第 127 聖詠

第 128 聖詠 登上の歌

イズライリ云ふべし、我が勤き時より被等多く我を攻め、我が勤き時より夢く我を攻めたれども、我に勝たざりき。耕す者は我が背に耕し、其毗を長くせり。然れども主は義なり、彼は悪者の縛を斷てり。頗はくはシオンを疾む者は皆羞を被りて退けられん。頗はくは彼等は屋の上の草、抜かれざる先に枯るる者の如くならん、刈る者は之を以て其手に盈てず、東ぬる者は其握に盈てざらん、過ぐる者は、主の降福は衝等に歸すべし、我等主の名を以て爾等を祝福すと云はざらん。

ニラネル タ⁵タ ニ セャレレム セ ハタサ ハンタ メーム *** 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【小聯祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、 我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



第 129 聖詠 登上の歌。

主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聽き給へ、願はくは爾の耳は我が祷の聲を聽き納れん。主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、 一覧を納れん。主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、 人の爾の前に敬まん爲なり。我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。我が靈主を得っこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。願はくはイズライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

第 130 聖詠

主よ、我が心驕らず、我が目高ぶらず、我大にして我が及ぶ能はざる事に入らざりき。我 きたり、たましいとう。 豊我が靈を鎮め、之を安んずること、母の乳を斷ちし児の如くせざりしか、我が靈我の うたと、於いて乳を斷ちし児の如くなりき。願はくはイズライリは主を恃みて今より世世に迄 らん。

第 131 聖詠 登上の歌。

主よ、ダワィドと其恋くの憂とを記憶せよ。被主に誓ひ、イアコフの有能者に約して云へり、我我が家の幕に入らず、我が榻に登らず、我が自に寐ね、我が臓に眠るを容るさずして、主の鶯に處所を得、イアコフの有能者の鶯に住所を得るに造ばんと。視よ、我等之をエフラフに聞き、之にイアリムの由に遇へり、往きて彼の住所に就き、彼の足凳に叩痒せん。主よ、爾及び爾が能力の匱は爾が妄息の所に立てよ。爾の司祭等は義を衣、爾の諸聖者は悦ばん。爾の僕ダワィドの鶯に、爾が膏つけられし者の面を轉ずる毋れ。主は眞實を以てダワィドに警ひて、之に背かざらん、首く、我爾が腹の果を以て爾の竇座に坐せしめん。若し爾の諸子我が約と、我が彼等に誨へんとする啓示とを守らば、彼等の諸子も赤家く爾の竇座に坐せん。蓋主はシオンを擇び、此を以て其住所とするを望めり、首く、此れ我が世世の安居なり、我此に居らん、蓋我之を望めり。我其糧を祝福し祝福せん、餅を以て其貧しき者を襲かしめん。我被を以て其司祭等に衣せん、其諸聖者は喜び悦ばん。我彼處に於てダワィドに角を長ぜしめ、我が膏つけられし者の鶯に「燈を立てん。我其敵に難を衣せん、其

第 132 聖詠

けいていせつま ま ぜん かな び かな こ たから あぶら こうべ しゅうしょ 関 即 アアロ 発 しく居るは、善なる哉、美なる哉。 是れ 寶 なる 膏 が 首 にありて、髯 即 アアロ

ンの髯に流れ、其衣の裾に流るるが如く、エルモンの露のシオン山に降るが如し。蓋彼處に於て主は降福と永世とを命じたり。

第 133 聖詠

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【小聯祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、 我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



別冊 日替わり 【望よ後に輸ぶ】三歌斎経に指示された調で歌う

(詠) 主よ、爾に籲ぶ、速に我に格り給へ。主よ、我に聽き給へ。主よ、爾に籲ぶ、速に我に格り給へ。爾 に籲ぶ時我が祷の聲を納れ給へ。主よ、我に聽き給へ。

願はくは我が祷は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。主よ、我 に聽き給へ。

	月	火	水	木	金
第1週	2	2	8	2	5
第2週	8	1	1	4	4
第3週	1	3	4	5	7
第4週	8	6	4	4	7
第5週	3	8	8	8	6
第6週	6	2	5	4	8

<歌い終わったら続けて誦経>

誦経

主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる言に傾きて、不法を を行ふ人と共に罪の推諉せしむる毋れ。

我が聲を以て主に籲び、我が聲を以て主に祷り、我が祷を其前に注ぎ、我が憂を其前に顯しまり。我が靈我の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、彼等は竊に我が為に網を設けたり。我右に自を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我に遁るる所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云へり、爾は我の避所なり、生ける者の地に於て我の分なり。我が籲ぶを聽き給へ、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救ひたま。

別冊 日替わり 三歌斎経 斎5

主や爾によぶのスティヒラ

<129 聖詠、116 聖詠の句の間にスティヒラを挿入して実施する。別冊に記載>

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

別冊 2 **八調**その週の調の、その曜日の生神女讃詞を歌ふ、

<本来は「月課経」からその日の生神女讃詞を歌うが、日本では「月課経」が翻訳されていないので、八調経の、その調、その曜日の生神女讃詞で代用する。>

輔祭 睿智、肅みて立て。

(詠) 聖にして福たる常生なる天の父の聖なる光榮の穏なる光イイススハリストスよ、我等日の入に至り、 晩の光を見て、神父と子と聖神を歌ふ、生命を賜ふ神の子よ、爾は何時も敬虔の聲にて歌はるべし、故に世 界は爾を崇め讃む。



別冊 三歌斎経 斎6

ポロキメンと創世記の読み、ポロキメンと箴言の読み

→戻る

輔祭 睿智。

誦経 (ソロ聖歌者) 歌ふ、⁷

たいのり こうろ かおり ごと なんじ かんばせ まえ のぼ か で あ ぐれ まっり ごと 願はくは我が祷は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。

(詠)繰り返す



ソロ (第一句) 主よ、爾に籲ぶ、速に我に格り給へ、爾に籲ぶ時、我が祷の聲を納れ給へ。

(詠) 願はくは我が祷は…

ソロ (第二句) 主よ、我が口に 衞 を置き、我が 唇 の門を扞ぎ給へ。

(詠) 願はくは我が祷は・・・

ソロ(第三句)我が心に邪なる言に傾きて、罪の推諉せしむる毋れ。

(詠) 願はくは我が祷は…

ソロ願はくは我が祷は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、

(**詠**) **我が手を擧ぐるは暮れの 祭 の如く納れられん**。 (之を歌ふに及びて、司祭并に衆人皆起立す。)

⁷ この歌を歌うとき、全員伏拝。ソロが歌うときは聖歌隊が伏拝。聖歌隊が歌うときはソロは伏拝するのが定番のスタイルだが、日本では最後の「願わくは」のみひざまずき。

司祭 [エフレムの祝文]

主吾が生命の主宰よ、意情と、愁悶と、陵駕と、箜談の情を我に與ふる勿れ。 (伏拜-次) 貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。 (伏拜-次) 鳴呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讚めら る、「アミン」。 (伏拜-次) ®

[重連祷]

輔祭 我等皆靈を全うして日はん、我等の思を全うして日はん、 (詠)主憐めよ

輔祭 主全能者、吾が列祖の神や、爾に祷る聆き納れて憐めよ、 (詠)主憐めよ

輔祭 神や爾のデなる**機*に因りて我等を憐めよ、爾に祷る聆き納れて憐めよ、

(詠) 主憐めよ、主憐めよ、主憐めよ

輔祭 我が國の天皇及び國を司るものの爲に主に祷らん、

輔祭 又教會を司る我等の主教 () 及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟 の爲に祷る、

輔祭 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の爲に祷る、

輔祭 又恒に記憶せらるる福たるこの聖堂の建立者、及び已に寐りし悉くの父祖兄弟、此の 處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に祷る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に者を獻り、善業を行ひ、之に労し、之に歌ひ、及び此に立ちて 爾の大にして豐なる憐を仰ぎ望む者の爲に祷る、

司祭 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光栄を爾父と子と聖神に獻ず、今も何も世世に、 (詠) アミン

[啓蒙者の連祷]

輔祭 啓蒙者や、主に祈るべし、

(詠) 主憐めよ

輔祭 信者や、啓蒙者の爲に祷らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、

輔祭 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、

輔祭 義の福音經を彼等に啓かん、

輔祭 彼等をその聖公使徒の教會に一にせん、

輔祭神や、爾の恩寵を以て、彼等を救ひ憐み佑け護れよ、

輔祭 啓蒙者や、爾等の首を主に屈めよ、

(詠) 主爾に

司祭 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至栄の名を讚揚せん、今も何時も世世

⁸ ギリシア教会では伏拝のみ。エフレムを唱えるのはロシアの習慣。

に、 (**詠) アミン**

輔祭 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、唯信者復艾安 和にして主に祷らん、 (詠) **主憐めよ**

☆注意:「啓蒙者出よ」以下が大斎中週間以後は以下のように変わる

輔祭 衆啓蒙者出でよ、啓蒙者出でよ、凡そ光照に備ふる者出でよ、光照に備ふる者祷るべし、(詠) 主憐めよ

輔祭 信者や、聖なる光照に備ふる兄弟、及び彼らの救の爲に主に祷らん、

輔祭 願くは主我が神は、彼等を堅固にし健立せん、

輔祭 智慧と敬虔との光照を以て彼等を照さん、

輔祭 宜しき時に於て、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、不朽の衣を賜はん

輔祭 水と聖神。とを以て彼等を生まん、

輔祭 彼等の信の全きを賜はん、

輔祭 彼等を其選びたる聖なる群れに合せん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、彼等を救ひ憐み佑け護れよ、

輔祭 光照に備ふる者や、爾等の首を主に屈めよ、

(詠) 主爾に

司祭 蓋爾は我等の光照なり、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

輔祭 凡そ光照に備ふる者出でよ、光照に備ふる者出でよ、衆啓蒙者出でよ、衆啓蒙者出でよ、啓蒙者一人もなく、

唯信者復又安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 叡智

司祭 蓋凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、 (詠)アミン

[信者の連祷]

輔祭 我等復又安和にして主に祈らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 上より降る安和と我等が霊の救の為に主に祷らん、

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に祷らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来たる者の為に主に祷らん、

輔祭 我等に諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが為に主に祷らん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て我等を佑け救い憐み護れよ、

輔祭 叡智

司祭 爾がハリストスの恩賜に依りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神[®]と 偕に崇め 讚めらる、今も何時も世世に、 (詠) アミン。

[大聖入]

(詠) 今天軍は見えずして我等と偕に奉事す、蓋視よ、光栄の王は入り給ふ、視よ、秘密の祭は已に備はりて荷ひ奉らる、信と愛とも以て近づくべし、永遠の生命に與る者とならんが爲なり、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ

選択1 キェフ調ボルトニャンスキー



選択2 ズナメニイ



司祭 [エフレムの祝文]

主吾が生命の主宰よ、意情と、愁悶と、陵駕と、箜談の情を我に與ふる勿れ。 (伏拜一次) 貞潔と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。 (伏拜一次) 鳴呼主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「ア ミン」 (伏拜一次) ⁹

⁹ ギリシア教会では伏拝のみ。エフレムを唱えるのはロシアの習慣。

【増連祷】

輔祭 我等主の前に吾が晩の湯を増し加へん

(詠) 主憐めよ

輔祭 已に獻ぜられ及び先に聖にせられし尊き祭品の爲に主に祷らん、

輔祭 人を愛する我が神が、之を覚聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香として享け、 我等に報いて、神妙の恩寵と聖神[°] の賜を降すが爲に祷らん、

輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に祷らん、

輔祭 神や、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭 此の晩の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

(詠) 主賜へよ

輔祭 平安の神使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の余日を平安と痛悔を以て終らんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の終が「ハリスティアニン」に適ひ、疾なく、耻なく、平安なること、及 びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜はんことを求む、

輔祭 信の同一と聖神[°] の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの 我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (**詠**) **主爾に**



司祭 主宰や、我等に、勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神・父をよびて言ふを賜

(詠) 天にをす 我等の父よ、願くは爾の名は聖とせられ、爾の國はx y 、

爾の旨は天に行はるるが如く地にも<u>行はれん</u>、我が日用の糧を受替我等に難へ給へ、 我等に^が償める者を我等党すが如く、我等の^が償を<u>党し給へ</u>、

我等を^い謗いに導かず、猶我等を凶惡より<u>救ひ給へ</u>。

司祭 蓋國と權能と光栄は爾父と子と聖神。に歸す、今も何時も世世に(詠)「アミン」

司祭 衆人に平安。

(詠)爾の神にも

輔祭 我等の音を主に篇めん。

(詠)主爾に

司祭爾が独生子の恩寵と慈憐とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の

神。と偕に讚揚せらる、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」



輔祭 謹みて聽くべし

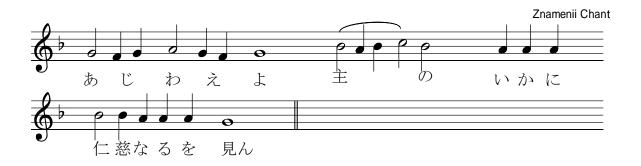
司祭 先に聖にせられし聖なるものは聖なる人に、

(詠) 聖なるは唯獨、主なるは唯獨、神・父の光栄を顯すイイスス・ハリストスなり、アミン。



【**領聖詞】第33 聖詠** 神品領聖¹⁰

(詠) 主の如何に仁慈なるを見ん、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ



司祭 神を畏るる心と信とを以て近づき來れ。

(詠) 我何れの時にも主を讚め揚げん、彼を讚むるは常に我が口にあり、



10 日本語の楽譜には「天の糧と生命の爵を味わえよ・・・」となっているが、「味わえよ・・・」からが正しい。

[領聖祝文]

主や、我信じ且つ承け認めて、爾を実にハリストス生活の神の子、罪人を救うが爲に世に来たりし者となす、衆罪人の中我第一なり、また信ず、此は乃ち爾が至浄の体、此は乃ち爾が至尊の血なりと、故に爾に祈る、我を憐れみ、我が自由と自由ならずして、言と行いにて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給へ、並びに我に定罪なく、爾が至上なる機密を領けて、罪の赦しと永生を得るを致させ給へ、「アミン」

神の子や、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給へ、蓋我爾の仇に機密を告げざらん、又、爾にイウ ダの如き接吻を為さざらん、乃ち右盗の如く爾を承け認めて曰ふ、主や爾の国に於いて我を記憶せよ、と。 主や祈る爾の聖なる機密を領くるは、我が爲に審案或いは定罪とならず、乃ち霊体の醫しと ならんことを。

【信徒領聖】

司祭 神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降せ。

(詠) 味へよ、主の如何に仁慈なるを見ん、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ



司祭 今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」主よ、爾の光栄を歌はんに、讚め歌を以て我が口に滿たしめ給へ。生命を施す聖なる爾の機密を受くるを我等に許せばなり、祈る我等を潔きに護り、日日に爾の途を習はしめ給へ、アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ<楽譜は次ページ>



謹みて立て、神聖、至浄、不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖機密を領けて、 輔祭 宜しく主に感謝すべし、 (詠) 主憐れめよ、主憐れめよ

此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、並に 輔祭 悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠)主爾に

蓋爾は我等の成聖なり、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も何時も世世に、 司祭

(詠)アミン。



司祭 平安にして出ずべし

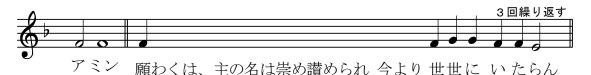
輔祭 主に祷らん、

- (詠) 主の名に因りて
- (詠) 主憐めよ



司祭 [升種外の祝文] 智恵を以て萬物を造りし主宰、全能者、爾の言ひ難き慮と多くの仁慈とを以て、我等を此の至と尊き日に導き入れて、靈と體との潔浄、諸慾の節制、復活の冀望を得せしせめんとする主、四十日を以て神が録しし文字の石版を爾の僕モイセイに授け給ひし至善者や、我等にも善き功労を遂げ、齋の程を經、"貳"ならざる信を守り、見えざる蛇の首を壊り、 罪に勝つ者と顯われ、定罪せらるるなく、聖なる復活に至りて之に伏拜するを得せしめ給へ、蓋爾父と子と聖神。の至尊至嚴の名は讚揚讚栄せらる、今も何時も世世に、

(詠)「アミン」 願くは主の名は崇め讚められて、今より世々に至らん。(三次)



司祭 願くは主の降福はその恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

司祭 ハリストス神我等の恃みや光栄は爾に歸す、光栄は爾に歸す、

(詠) 光栄は父と子と聖神[®]に歸す、今も何時も世世に、「アミン」 主憐めよ。 (三次) 福を降せ



主憐れめよ、主憐れめよ、主あわれめよ ふくを くだーせ

司祭 [発放詞]ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母、聖 ()、我等の聖神父問答者グリゴリイ、及び諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり、

(詠) [萬寿詞] 「アミン」神よ、我が國の天皇、及び國を司る者、我等の主教() 及び悉くの正教のハリスティアニン等を幾議にも護り給へ。 <終わり>

晩課式 先備聖体礼儀なし、大斎中の月、火、木

誦経、

また たれら おう かみ こうはい 來れ、我等の王・神に叩拜せん。

th phis so かみ こうはい sos 來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

また 來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

首誦聖詠

我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、爾は光樂と威嚴とを被 れり。爾は光を袍の如くに衣、天を幔の如くに張る、水の上に爾の宮を建て、雲を爾 の車と爲し、風の翼にて行く。爾は風を以て爾の使者と爲し、焔を以て爾の役者と これ おお やま いただき みず た なんじ おどし よ こ はし なんじ いかづち こえ よ 之を覆へり、山の 巓 に水立つ。 爾の恐嚇に依りて此れは奔り、 爾の 雷 の聲に由りて スタータ けもの の の ウさぎウキ そのかわき とど そら とり そのかたわら す ネビ ぬいだ こネ 諸 の獣に飲ましむ、野の 驢 は其渇を止む。空の鳥は其傍に棲み、枝の間より聲を いだ。なんじ うえ みゃ やま うるお ち なんじ わざ み にて 繋き 足れり。爾は草を獣の たのし あがら その おもて うるお パン ひと こころ やしな しゅ き そのう はくこうぼく を 樂 ませ、膏 は其の 面 を 澤 し、餅は人の 心 を 養 ふ。主の樹、其植えたるリワンの栢香木 た とり そのうえ す つく まつ つる すみか たか やま しか ため いわお うきぎ ため は 優き足れり、鳥は其上に巣を造る、松は鶴の棲處たり、高き山は鹿の爲、磐石は 兎 の爲 り、其時林の獸皆出で廻る、獅は獲物の爲に吼えて、其食を神に乞ふ。日出づれば、彼等 まっま まのれ あな ふ ひと その わぎ ため い はたら くれ いた しゅ なんじ じゃぎ なん 集りて己の穴に伏す。人は其工作の爲に出で、勞きて暮に至る。主よ、爾の工業は何ぞ は無數の動物、大小の生物あり、彼處には舟通ひ、彼處には彼の大魚あり、爾造りて其中 ただに游ばしむ。彼等は皆爾が時に随ひて食を予ふるを待つ。之に予ふれば受け、爾の手を ゆったまものを 開けば 賜 に饜かせらる、爾の顔を隱せば惶れ惑ひ、其氣を取り上ぐれば死して塵に歸 る。爾の氣を施せば造られ、爾は又地の面を新にす。願はくは光榮は世世に主に在ら ん、願はくは主は己の造工の為に樂まん。彼地を觀れば、地震い、山に觸るれば、煙起つ。我生ける中主に歌ひ、世を終るまで我が神に歌わん。願はくは我が歌は彼に悦ばれん、我主の為に樂まん。願はくは罪人等は地より消え、不法の者は存するなけん。我が靈よ、主要を讃め揚げよ。

ひ そのい ところ し なんじくらやみ し すなわちょ 日は其入る處を知る、爾 暗 を布けば、 則 夜あり。

主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作れり。

ニラネル タサ ニ サレレム サ ハサ ハワ ゚゚゚
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【大連祷】

輔祭 我等安和にして主に祷らん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に祷らん、

輔祭 此の聖堂、及び信と 質と神を畏るる心とを以て此に 菜る者の爲に主に祷らん、

輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、 悉 くの教衆、及び衆人の爲に主に祷らん、

輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に祷らん。

輔祭 此の都邑と**た。** あると地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に祷らん、

輔祭 氣候順和、五穀豐穣、天下泰平の爲に主に祷らん、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、難難に遭ふ者、覚覚となりし者、及び彼等の教の 為に主に祷らん、

輔祭 我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に祷らん

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救ひ憐み護れよ、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを 記憶して、我等己の身及び互に 各 の身を以て、 並に 悉 くの我等の生命を以て、ハリストス神に 委託せん、 (詠)主爾に

司祭 蓋 凡そ光栄尊貴伏拜は爾父と子と聖神。に帰す、今も何時も世世に、 **(詠)「アミン」**



第18「カフィズマ」を誦す。

第 120 聖詠 < 119、121、123 省略>

我目を擧げて山を望む、我が助は彼處より來らん。我が助は天地を造りし主より來る。彼は爾の足に躓くを許さざらん、爾を守る者は眠らざらん。イズライリを守る者は眠らず、復ねず。主は爾を守る者なり、主は爾の右の手の庇蔭なり。晝に日は爾を傷めざらん、なんじを禁むる者なり、主は爾の右の手の庇蔭なり。晝に日は爾を傷めざらん、なんじを禁むる者なり、主は爾の右の手の庇蔭なり。一世は不安による。他はなんじを傷めずらん、たる。これをいたり。主は爾を諸の福より守らん。主は爾の出入を守りて世世に至らん。

第 122 聖詠

誦経 光栄は父と子と聖神。に帰す。



誦経 今も何時も世世に、「アミン」

第 126 聖詠 < 124、125、128 省略>

者し主家を造らずば、造る者徒に勞し、若し主城を守らずば、守る者徒に儆醒す。衛 等徒に夙に興き、遅く寝ね、憂の餅を食ふ、時に彼は其愛する者に寝ぬるを賜ふ。視よ、 主が與ふる所の業は諸子なり、其褒賞は腹の果なり。少壮の諸子は、勇者の手にある箭 の如し。此を其箙に充てたる者は福なり、彼等門の内に在りて敵と共に言ふ時、羞を得 ざらん。

第 127 聖詠

凡そ主を畏れて、其途を行く者は福なり。爾は己が手の勞に依りて食はん、爾は福なり、爾は己が手の勞に依りて食はん、爾は福なり、爾は善を得たり。爾の妻は爾の家に在りて、實繁き葡萄の樹の如く、爾の諸子は爾の席を環りて、橄欖の枝の如し、主を畏るる者は此くの如く降福せられん。主はシオンより爾に降福せん、爾在世の諸日イエルサリムの安寧を視ん、爾は己が子の子を見ん。願はくは平安はイズライリに歸せん。

誦経 光栄は父と子と聖神。に帰す。



誦経 今も何時も世々に、「アミン」。

第 130 聖詠 < 129、131 省略>

主は、我が心驕らず、我が自高ぶらず、我大にして我が及ぶ能はざる事に入らざりき。我 きま、我が心驕らず、我が自高ぶらず、我大にして我が及ぶ能はざる事に入らざりき。我 きまが靈を鎮め、之を安んずること、母の乳を斷ちし児の如くせざりしか、我が靈 我の まただいて乳を斷ちし児の如くなりき。願はくはイズライリは主を恃みて今より世世に迄 らん。

第 132 聖詠

兄弟睦しく居るは、善なる哉、美なる哉。 是れ寶なる膏が首にありて、髯即アアロンの髯に流れ、其衣の裾に流るるが如く、エルモンの露のシオン山に降るが如し。蓋彼處に於て主は降福と永世とを命じたり。

第 133 聖詠

この諸僕、夜中主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、今主を崇め讃めよ。爾の手を擧げ、 せいしょ むか としゅ あが ほ めよ。 天地を造りし主はシオンより 爾 に降福せん。 たりまい きちょう せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

【小聯祷】

我等復又安和にして主に祷らん。

(詠) 主憐めよ。

神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ。

(詠) 主憐めよ。

至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、 我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん。

(詠) 主爾に

司祭高聲 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。(詠)「アミン」



【主よ 爾 に籲ぶ】三歌斎経に指示された調で歌う

	_		-		
	月	火	水	木	金
第1週	2	2	8	2	5
第2週	8	1	1	4	4
第3週	1	3	4	5	7
第4週	8	6	4	4	7
第5週	3	8	8	8	6
第6週	6	2	5	4	8

第1週、月、火、木は2調



嗣ぎて以下の句を誦す、

主よ、我が口に衞を置き、我が唇の門を扞ぎ給へ、我が心に邪なる言に傾きて、不法をおった。 かんと共に罪の推諉せしむる母れ、願は我は彼らの甘味を嘗めざらん。

義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美き膏我が首を悩ます能はざる者なり、唯我が祷は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巌石の間に散じ、我が言の業和なるを聽く。我等を土の如く祈り碎き、我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、ただりがありは爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる勿れ。我が爲に設けし弶、不法者の難より我を護り給へ。不虔者は己の網に羅り、唯我は過ぐるを得ん。<以下141、129 聖詠略>

別冊 三歌斎経 斎5

主や爾によぶのスティヒラ

「聖にして福たる」歌わずに読む。<別冊に含む>

別冊 三歌斎経 斎6

ポロキメンと創世記の読み、ポロキメンと箴言の読み

→戻る

主よ、我等を守り、罪なくして此の晩を渡らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讚められ、爾の名は世世に尊み歌はる、「アミン」

主よ、爾を恃むに因りて、爾の 憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讚めらる、爾の 端を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讚めらる、爾の 誠を我に訓へ給へ。主宰よ、爾は崇め讚めらる、爾の 誠を我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讚めらる、爾の 誠にて我を照し給へ。

主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讚は爾に歸し、歌は爾に歸し、歌は爾に歸し、光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

【増連祷】

輔祭 我等主の前に吾が朝の 祷 を増し加へん、

(詠) 主憐めよ

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け救ひ憐み護れよ、

(詠) 主憐めよ

輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、

(詠)主賜へよ¹¹

輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の罪と 満とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の $^{t = 1}$ に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、

輔祭 我等の生命の「終」が「ハリスティアニン」に適ひ、「疾」なく、恥なく、平安なること、及び ハリストスの畏る可き審判に於て宜しき「對」をなすを賜はんことを求む、

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを

記憶して、我等己の身及び互に着の身を以て、並に悪くの我等の生命を以て、ハリス トス神に委託せん、 (詠)主爾に

蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光栄を爾父と子と聖神。に獻ず、今も何時も世 司祭 (詠) 「アミン」 世に、

衆人に平安 司祭

(詠)爾の神。にも

我等の首を主に屈めん 輔祭

(詠)主爾に

司祭 何時も世世に、 (詠) 「アミン」



三歌斎経 斎 7

挿句のスティヒラ

^{11 「}主賜えよ」のメロディはことばに合わせてシンプルにした。

→戻る

【聖抱神者シメオンの祝文】

しゅさい いまなんじ ことば したが なんじ ぼく ゆる あんぜん ゆ けだしわ 主宰 よ、今 爾 の 言 に 循 ひて、 爾 の僕を釋し、安然 として逝かしむ。 蓋 我が め なんじ すくい み なんじ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん てら ひかり 目は 爾 の 救 を見たり、 爾 が萬 民の前に備へし者なり、是れ異邦人を照す、 光 およ なんじ たみ ひかえ 及び 爾 の民イズライリの 榮 なり。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの かれら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

ニラネル タサ ニ ササレレム セ ハサ ハワ ゚゚
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

主憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ ょよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。司祭 蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

(詠) 「アミン」

【生神女讃詞】第四の調 〈楽譜は次ページ〉

生神・童貞女よ、慶べよ、恩寵に滿たさるるマリヤよ、主は爾と偕にす、爾は女の中にて讚美たり、爾の出の果も讃美たり、爾は我等の靈を救ふ主を生めばなり。叩拜-次

光榮は父と子と聖神に歸す。

ハリストスの授洗者よ、我等衆人を記憶して、我が不法より救はるるを得しめ給へ、我等の為に祈祷する る恩寵は爾に賜はりたればなり。叩拜-次

今も何時も世世に「アミン」。

せい しょ しから たま なんじら きゅうせいしゅ まえ 聖使徒と諸聖人よ、我等の爲に祈りて、我等に 禍 と憂より救はるるを得しめ給へ、爾等は救世主の前に吾が熱心の中保者なればなり。叩拜一次





はいません。 ・ はいました。 ・ はいました。 ・ といった。 ・ といた。 ・ といった。 ・ といった。 ・ といた。 ・ と

こうえい ちゃ こ せいしん き いま いっ よよ 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」

ヘルワィムより 尊く、セラフィムに 並 なく 榮え、貞操を壊らずして神 言 を生みし實の 生神女 たる 爾 を崇め讚む。

神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭、永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讚めらる、今も何時も世世に、「アミン」 誦経 天の王よ、我が国を佑け、正教を固め、異教を循はせ、世界を穏にし、克く此の 世いどうを護り、已に過ぎ去りし我等の諸父兄弟を義人の住居に置き、並に我等の痛悔と承認 とを納れ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

司祭【聖エフレムの祝文】

^{かみ} われざいにん きょ たま 神よ、我罪人を浄め給へ。 (躬拜 12 次)

主吾が生命の主宰よ、怠惰と、愁悶と、陵駕と、空談の情を我に與ふる勿れ。 ^{みさお} 貞操と、謙遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與へ給へ。

鳴呼主王や、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜へ、蓋爾は世世に崇め讚めらる、「アミン」。叩拜一次

しゅあわれ 主憐めよ。三次

たが 願はくは主の名は崇讃められ今より世世に至らん。三次、

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。

第 33 聖詠

とゆ そのしょぼく たましい すく かれ たの もの ひとり ほろ 主は其諸僕の 靈 を救ひ、彼を頼む者は一人も亡びざらん。

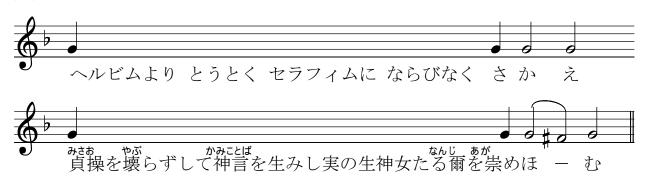
司祭、睿智

つね きいわい まった きず しょうしんじょ わ かみ はは なんじ きいわい とな まこと あた (詠) 常に 福 にして全 く玷なき生神女、吾が神の母なる爾 を 福 なりと稱ふるは眞 に當れり、



司祭、至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ

(詠)ヘルワィムより尊〈セラフィムに並びな〈榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の生神女たる爾を崇め讃む。



司祭、ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す

(詠) 光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、「アミン」。主憐め、主憐め、主憐めよ、福を降せ。



司祭【發放詞】

ハリストス我等の 真 の神は、其至浄なる母、光榮なる 尊 き預言者 前驅授洗イオアン、光榮 にして讃美たる聖使徒、聖 (某) 本堂及び本日聖人、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及び

アンナ、及び諸聖人の祈祷に因りて、我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。詠隊 「アミン」。

(詠) 萬壽詞、

